



私の柔道回想録

嘉陽外科
嘉陽 宗吉

齢 80 過ぎとなり、自分が歩んで来た今までの人生を静かに振り返ってみると、職業としての医師の外に何をして生きて来たであろうか、趣味の面で人生に些かの潤いがあったであろうか、静かに胸に手を当てて考えても、何もない。全く無趣味極まる人生であったと悔やまれてならない。然し、ただ一つだけはある。それは柔道だ。それで柔道と私との関係について子供や孫達に話しておく積りで思い出すままに書いてみたいとおもう。

(小学校時代)

周囲にラジオ、テレビも無い時代で、柔道に関する情報は皆無で、例えあったとしても子供の時は柔道についての知識はゼロで何の興味も無かった。子供同志で相撲をとって遊ぶのが関の山であった。

(旧制中学校時代) 大阪府立市岡 (いちおか) 中学校

旧制中学校では正課の武道として剣道、柔道があり、何れかを選ばねばならなかった。剣道用具を揃えるには費用がかかるので、私は柔道を選らんだ。

或る日、授業時間に先生が「嘉陽、あとで教官室に来るように。」と言われた。私は(授業態度が悪かったのかな、真面目に受けた積りだが。)と心配して後刻、恐る恐る教官室を訪ねると、「嘉陽は外の運動部に入っているのか?」、「いいえ」、「それなら柔道部にはいらんか、そして先輩たちのように体を鍛えて強くなれ。」「はい、入れてください。」で一件落着。即日、柔道部に入った。当時、上級生には4年生、5

年生で二段、三段がいて懂れていた。「ようし、何時かは俺も!」と言う気があった。しかし、(なぜ先生は俺を柔道部に誘ったんだろう?、ひょっとしたら俺、才能があるんと違うかな?)と自惚れたが悪い気はしなかった。

翌日から練習に身を入れた。しかし、この時期に先生が背負投げを教えてくれたのが最期の教えとなった。それは先生が間もなく出征され、すぐに戦死されたからである。

この頃から日本は敗戦の気配が次第に濃くなり中学の低学年にも学徒動員令が出て、我々も軍需工場に引き出され、勉強やスポーツ所ではなくなった。これが中学3年の夏まで続いて敗戦となった。敗戦後は生活難で柔道どころではなかった。中学5年を卒業するまで柔道とは無縁の生活であった。

(旧制高校時代) 第七高等学校 (通称七高、鹿児島にあった)

この時代は米軍の命令で柔道、剣道は禁止されていた。しかし、七高では同好の士が集まって鹿児島市内のお寺で密かに練習(畳を立てて、外部からは見えないように、声を出さないように)していた。住職が柔道好きで協力してくれた。しかし試合も無く、大した成果も無かった。

(大學時代) 名古屋大學医学部

その頃、米軍による学校柔道禁止令は解かれた。

私は大學の寮にいたが、某日、医学部の上級生3名が訪ねてきて、「名大に柔道部を復活しようとして運動している、君も参加しないか。」と言う。私は即座にOKした。某日、集まった顔触れは名大の全学部からなり、即ち法学、文学、経済、教育、農学、理学、工学、医学、等々多彩で、何れも過去に多少とも柔道の経験があり、「柔道大好き」の連中ばかりであった。

柔道部の行事として各種の試合があった。私の戦歴について述べると、多くの勝ち負けがあったが概して勝ちの方が多かったと思う。

(1) 七帝戦

これは旧帝国大学即ち北海道、東北、東京、名古屋、京都、大阪、九州の7大学間の試合で毎年、夏休みに各大学持ち回りで行われた。これは7大学の学生の柔道のレベルが似通っていたので行われていた。

この七帝戦で私は大いに活躍した。他大学との試合で私はよく背負投げで4~5人抜きをやった。この事は大会終了後の大会長総評で褒められた。

(2) 東海地区学生柔道大会

最初の団体戦で名大は私が頑張って5人抜きをしたが敗退した。次いで個人戦で私は名大代表で出た。対戦相手の籤引きで最初に巨漢の優勝候補NO.1のI選手(身長190センチ余、体重110キロ余)と当たってしまった。「えらい事になった、まるで電柱と試合をするようなものだ。勝負はもう始めから判っているから、俺は棄権する。」と言うと名大の先輩達が「恥ずかしい棄権は絶対にするな!担架は用意するから絶対に出ろ!」。との厳命。そこで私は腹を決めて試合に出た。審判の「始め!」の合図で私は相手の襟をとると同時に背負を掛けました、私は心中に(どうせ負けるんなら一回くらい技を掛けるゼスチャーをやらんと格好が悪い。)くらいの気持ちであった。所が意外や相手の足先が畳から浮きかけた感じがしたので、驚いたのは私である。まさかと思ったが私はこの機を逃さず担いだ相手を畳に投げつけた。ズシンと大きな音をたてて相手は畳に落ちた。相手もまさかの、よもやの展開に仰天したことであろう。会場は騒然となった。そして試合場から退場した時に相手選手が監督からこっぴどく叱られているのが垣間見えた。これらの事は一瞬の事であったが私の脳裏には鮮明に焼きついている。この一件があつてから私は俄然、気が大きくなり、実力以上の勝負をして二段、三段の相手を次々に倒して決勝戦まで破竹の勢いで勝ち進んだ。しかし決勝戦では五段の相手に寝技(押さえ込み)で敗れた。後で聞く所によればこの五

段は某大学の正規の学生ではなく聴講生で、家では一家で柔道場を経営しているとの事であった。言わばプロであった。道理で学生にしては強すぎると納得した。

(3) その他の試合

大学在学中、アメリカ軍との試合では物凄い巨漢(恐らく130キロ以上はあった)と対戦したことがあるが、(こんなのに押さえ込まれたら息もできんわい)と思い、試合始めの合図と同時に一気に背負投をかけたから見事に決まり、アメリカ軍チームは啞然としていた。

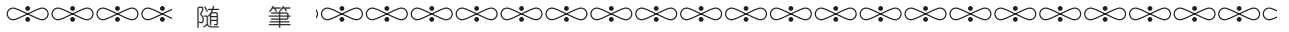
柔道余話

(1) 大学卒業後の某日、新幹線に乗っていると、通路を何回も往復し、私の近くに來ると、ゆっくり歩く男がいる。始めは気にしなかったが、やがて注意して見るとはっと気が付いた(H大のI君だ!)と同時に相手も(名大の嘉陽さんでしょう!)と來た。それからビールと茶菓子を買ひ、往時を偲びながら寸時歓談した。I君とはかつて七帝戦で戦ったことがある。

(2) 私は卒業後の或る時期に船医をしていた。乗っていた船が定期検査のため、岡山県の造船所にドック入りした事がある。或る時、私は暇なので船の周りをぶらぶらしていたら、技術者らしい人がじーっと私を見つめるので私は「此処に居てはいかんのかな」と立ち去ろうすると、「失礼ですが名大の嘉陽さんと違いますか?」と声をかけてきた。よくよく見るとはっと思い出した。ヘルメットをかぶっていたので始めはよく解らなかったがH大のN君だ。彼とも大戦した覚えがある。彼の仕事が終わってから近くの料亭でご馳走になり、往時を思い出して暫し歓談した。愉快であった。

なんで柔道か??わからない??

私は中学校入学以来、柔道には随分、時間を費やしてきた。柔道着は汗臭いし(年中、殊に夏は)、冬には裸では冷たいし、ことに氷の張る名古屋の冬はひどかった、震えあがった、愉



快であった思い出は無い。練習はきついし、疲れるし、少しも面白くない。殊に、七帝戦前の合宿練習はきつかった、夜は階段を四つん這いでないと昇れなかった。お箸も重くて食事しにくかった。それでも（練習の量のみが勝敗を決する）との信念で飽きもせずに続けてきたのだろう。今、思えば我ながら不思議である。よくよく、畳に投げられても反射的に起き上がり、痛くないこと、そして肉体を酷使することに快感を覚えたのかもしれない。

何で背負い投げか？

中学に入学した時に始めて習ったのが背負い投げで、それで戦前の柔道はおわり。柔道の投げ技は沢山あるが、また練習もしたが、試合の時、ここ一番となると、どうしても背負い投げが反射的に出てしまう。

学生柔道仲間では（名大の嘉陽の背負い投げは要注意）とマークされた。

昔の柔道仲間が未だに柔道とは縁が切れず、歳をとっても時折、道場に顔出ししているのは、まさに「雀、百まで踊り忘れず。」の類であろうが、判るような気がする。

段位について

柔道をしていた人はよく何段かと問われることが多い、私は初段である。しかし学生時代の最盛期には三段か四段の実力はあったと思っている。多くの試合では三段には負けなかった、四段、五段には勝ったり負けたりした。

学生の始めの頃はずっと白帯で試合に出ていた。その理由は（段位は時期、体力によって変わるものだ。永久不変ではないから取らなくともよい。）と考えていた。段位を取るには費用もかかるし、それよりはビフテキでも食べたほうが強くなると思った。それで試合には何時も白帯で出ていた。そして大抵、勝つのでしまい

には（白帯の帝王）と新聞に書きたてられた。

ところが後日、学生柔道連盟から「実力相応の黒帯を締めて試合に出るように。」と注意を受けた。それで昇段試合を受けて一回で初段を取った。以後は黒帯を締めて試合に出るようになった。

大學卒業後、鳴門病院に勤務している時は近くの鳴門高校に出かけて練習した。沖縄に帰ってからは赤十字病院に勤めながら、近くにある警察本部の道場に行つて練習していた。

開業してからは何処の団体にも所属しないので試合には出られず、次第に柔道から足は遠のいた。

その後は沖縄相撲に転向したがこれは後日に話そう。

今は体力も衰えて血気盛んだった面影は全くない。歳には勝てず寂しい限りである。



1953年に私が試合にでた時の毎日新聞スナップ写真

随筆



『イタリアで考えたこと』 (I)

三原内科クリニック
喜久村徳清

あこがれのイタリア旅行が平成24年5月に実現した。成田空港発のANA機でミュンヘン空港へ直行し、そこからヴェネツア、フィレンチェを経由してローマへ向け高速バスで移動しながら、ガイドが時間をみつけては懇切に説明するイタリアの話に耳を傾けながら私の旅は続いた。

『イタリアは国家が共和制で、単一民族ではない。ミラノは商業の街、産業革命後に盛えて、スマートである。南はのんびり、中心部はどっちつかず、我が道を行く。ギリシャ、ムーア、イスラム、オーストリア、スロベニア人、混ざっている。

三千年の歴史があって大陸的、のんびりしていて、イタリア商人がいる。ナポリはゴテゴテ、陽気で感性があり明るい元気なイタリア人という風。フィレンチェはゆったり、のんびりしている。ローマは都会人的、急いでいる。しきたりやルールがあり、北のミラノといつも争いあっている。口には出さないが、ローマには三千年の歴史の自負があり、フィレンチェはたかが産業革命以後ではないかという思いがある。イタリアには日本の様な標準や平均的なものはない。イタリア人は要領がよい。フランス人は冷たい感じで、スペイン人は歩くのが面白い。

イタリア人が要領いいのは子供の頃からの躰がある。問題をトコトン議論する。相手の話にはいい返す。反論してもやり返す。絶対負けないでやり返してくる。根気のいることも馴れていて、そして世界にとび出すイタリア商人ができあがる（さらに映画「ゴッドファーザー」のマフィアの世界が現実のものとなるのであろうか）。東洋でいえば中国の華僑で、世界中に中国人街を造っている。イタリアで今、一番対抗心を持っているのはスペインのバルセロナ。経

済的にも華やかになってきた。

女の子にはかわいそうなほどシツケが厳しい。思春期になる前から自己責任を鍛えられる。日本人からみれば親にも甘えさせたい年頃でしようのに、一人部屋を与えられ、自分で判断するよう教育される。悪い男にだまされないように強い女ができる。結婚して、半年も別居生活になると離婚する。女性が言いだし、日本の単身赴任はここでは理解できないし通用しない。

イタリア人は vacation を楽しむのがうまい。週末の休日もしっかり楽しむ。月曜日は週末の疲れがたまり、仕事にならず、火曜、水曜日に仕事をする。木曜日にはもう次の週末をどう過ごすか考え、仕事が手につかない。イタリアでビジネスをする時に、心得ておかねばならない。ガイドの仕事も彼らのことも考えながらしている。それでも例外はある。』

天候に恵まれ、トラブルもなく順調にローマに着いた（写真1）。バチカン市国、サンピエトロ大聖堂、広場に案内され（写真2）、現地



写真1.ローマ、テルミニ駅。宿泊ホテルの近くから撮る。



写真2.バチカン市国、サンピエトロ大聖堂前広場にて。

の名ガイドの案内を聞きながらゆったり時間をとって観光した。

それから大型バスでテヴェレ川に架かる橋を渡り、フォーリ・インペリアーリ通りからフォロ・ロマーノを観ながらガイドは効率的な切符の買い方等を話していたが、何故見降ろせる位置に道路が走っているのかなどと思いながら聞いていた。コロッセオの観光スポットで下車すると、圧倒的な存在感（写真3）。さらに近づいて見たくなる程だが、撮影スポットへさえも離れてはいけな急ぎの団体行動。そのためガイドに勧められた『DVD video 付き、重ねて見るローマ。昨日と今日』、『ローマ 過去と現在』の2冊を買って後で見ることにし、コンスタンティヌスの凱旋門を右手に見ながらバスに乗り込んだ。

小休憩の後に、クイリナーレ宮殿大統領官邸、トレヴィの泉に行きイタリア議会下院の建物（写真4）を横切った。警備の守衛は1人、

近くには警官もいたが日本では考えられないほどのオープンな雰囲気である。

トレヴィの泉、スペイン階段観光で楽しい旅は続き、午後は自由行動となり、私は一人、システーナ礼拝堂、ラファエロの間のあるバチカン博物館に行き（写真5）、そして、映画「ローマの休日」で有名な「真実の口」のあるサンタ・マリア・イン・コスメディン教会、その裏手にあるチルコ・マッシモを訪ねた。そこは名優チャールトン・ヘストン、ユル・ブリンナーが熾烈な戦車競争を演じた映画「ベン・ハー」の舞台であったが、今ではその面影は全くなく、芝生で埋めつくされた市民の憩いの場となっていた。

帰国後、旅の余韻が残っているなか、「ローマ。昨日と今日」を読み進めていると、大変大きなショックを受ける事になる。

（次号へ続く）



写真3. 観光スポットより真近かに見るコロッセオ。写真左側にはコンスタンティヌス帝凱旋門、フォロ・ロマーノがある。



写真4. イタリア議会下院。国旗が掲げられている。警備員は1人、門前に立つ。



写真5. バチカン博物館（MUSEI VATICANI）入口。意外に小さな、質素な入口が印象的。